

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5842 参照 (イメージ)

新試験研究炉完成予想図 (イメージ)

新試験研究炉完成予想図 (イメージ)

2023.7
No. 769



※ P5841 参照



※ P5842 参照

目次

[大学の動き]

- 名誉教授懇談会を開催 5840
- 京都大学春秋講義(令和5年度春季講義)を開催 5841

[部局の動き]

- 「もんじゅ」サイトの新試験研究炉設置に係る関係機関間の協力協定を締結 5842
- 医学部附属病院で令和4年病院長賞表彰式を挙行 5842

[寸言]

- 人生万事塞翁が馬 望月 晴文 5844

[随想]

- 東南アジアの森林調査を通じて今思うこと
名誉教授 神崎 護 5845

[洛書]

- Kyoto iUP 佐々木 幸喜 5846

[訃報]

- 若林 二郎 名誉教授 5848
- 高橋 康夫 名誉教授 5849
- 吉田 善一 名誉教授 5850



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

大学の
動き

名誉教授懇談会を開催

6月16日(金)に百周年時計台記念館にて4年ぶりに名誉教授懇談会を開催しました。135名の名誉教授のほか、総長、理事、部局長など合わせて168名が参加しました。

もともと名誉教授懇談会は春と秋の年2回の開催でしたが、コロナ禍をきっかけに、今年度からは春のみに開催することとなりました。それに伴い、廃止となった秋の名誉教授懇談会で慣例として行っていた名誉教授による講話会は、春の名誉教授懇談会にて行うこととなり、南川高志 名誉教授(文学研究科)が「古代ローマ人の心」と題して講演しました。

その後の懇親会は、湊 長博 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、尾池和夫 元総長による乾杯の発声により始まりました。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告などに話が弾み、盛会のうちに終了しました。



講演をする南川名誉教授



挨拶をする湊総長



乾杯の発声をする尾池元総長



懇親会の様子

(総務部(総務課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

京都大学春秋講義（令和5年度春季講義）を開催

京都大学春秋講義は、京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、1988年秋から開講している公開講座です。

今回はメインテーマを「雨と私たちの暮らし」として、4月21日（金）、26日（水）に全2回の講義を行いました。第1回は中北英一 防災研究所所長による「気候変動が豪雨に及ぼす影響と適応」、第2回は川池健司 防災研究所教授による「豪雨災害時に起こること、できること」と題した講義が行われ、2日間で計232名が参加しました。

参加者は講師の説明に熱心に耳を傾け、「地球温暖化と豪雨災害にどのような関係性があるのか受講する前はぼんやりとした考えしか持っていませんでしたが講義をお聞きして、はっきりと理解できた気がします」、「なぜ雨が降るのかという基本的なことから気候変動まで幅広く解説していただいてよく理解できました」、「災害の発生と発生時の対応について、わかりやすく教えていただき、大変有用な受講であったと思います」など多数の感想が寄せられました。

【関連リンク】

本講義内容は京都大学「YouTubeチャンネル」にて配信中です。申し込み不要でどなたでもご覧いただけます。

Kyoto University / 京都大学 - YouTube

<https://www.youtube.com/c/KyotoUniversityOfficial>



講義する中北教授



講義する川池教授



会場の様子

(渉外部 (渉外課))

[目次に戻る ↗](#)



「もんじゅ」サイトの新試験研究炉設置に係る関係機関間の協力協定を締結

複合原子力科学研究所は、日本原子力研究開発機構、福井大学附属国際原子力工学研究所と「もんじゅ」サイトの新試験研究炉設置に係る関係機関間の協力協定を締結しました。

協力協定は、新試験研究炉の計画を着実に進めるための機関間の連携を目的としたものであり、5月8日(月)に、福井大学附属国際原子力工学研究所において、3法人の長の立ち会いのもと、締結式を行いました。

本計画の推進にあたっては、学术界、産業界、地元関係機関などからの幅広い意見を集約しつつ、安全確保を最優先に、立地地域ならびに国民の皆さまのご理解を得ながら着実に取り組んでまいります。



左から、上田孝典 福井大学長、湊 長博 総長、左から4人目が黒崎 健 複合原子力科学研究所長
小口正範 日本原子力研究開発機構理事長

(複合原子力科学研究所)

[目次に戻る](#)

医学部附属病院で令和4年病院長賞表彰式を挙行

医学部附属病院は、令和4年病院長賞表彰式を3月31日(金)に挙行了しました。

同賞は、本院における教育、研究、診療、管理運営などについて、極めて顕著な貢献があったと認められる若手教職員または診療科などを表彰する制度として設けられたもので、今回は個人および団体の推薦の中から5組の受賞者を決定しました。

表彰式では、この日が任期の最終日となった宮本 享 病院長より、5組の受賞者および受賞内容が発表され、表彰状が授与されるとともに、祝辞が述べられました。

表彰式終了後には引き続き宮本病院長の退任式を挙行し、出席した病院職員から宮本病院長と受賞者に大きな拍手が送られ、盛況のうちに閉式しました。

令和4年病院長賞受賞内容

①PFMセンター

質の高い医療の提供を目指した取り組みを行った。また、患者サービスの向上に資する取り組みを行った。

②京都大学肺移植チーム

2022年2月16日に世界で初めてのABO血液型不適合生体肺移植を人工呼吸器管理中の患者に実施。脳死肺移植が待機できない重症患者に血液型が適合する生体ドナーが家族内にいない場合の新たな救命法を開発した。

部局の
動き

③肝胆膵・移植外科/小児外科

脳死ドナーからの肝小腸同時移植手術を行った。

④摂食嚥下診療センターチーム

医学部附属病院内において、入院時全例嚥下スクリーニングの実施や、NSTと共同で頭頸部癌専門 Nutrition & Swallow Support Team として、治療前、治療中、そして治療後の栄養管理に貢献している。嚥下診療の活動範囲を院内だけでなく、地域医療にまで広げるため、関西圏の大学病院では初となる、摂食嚥下診療センターを2022年4月に開設した。

⑤先端医療研究開発機構医療開発部

優れた基礎研究の成果を革新的な医薬品・医療機器などとして国民に提供することを目指す「橋渡し研究支援機関」の認定および、医学・歯学・薬学系以外の先端技術・知識を利活用することで、医療イノベーションを推進する「橋渡し研究プログラム(異分野融合型研究開発推進支援事業)」の拠点認定に貢献した。



受賞したPFMセンター



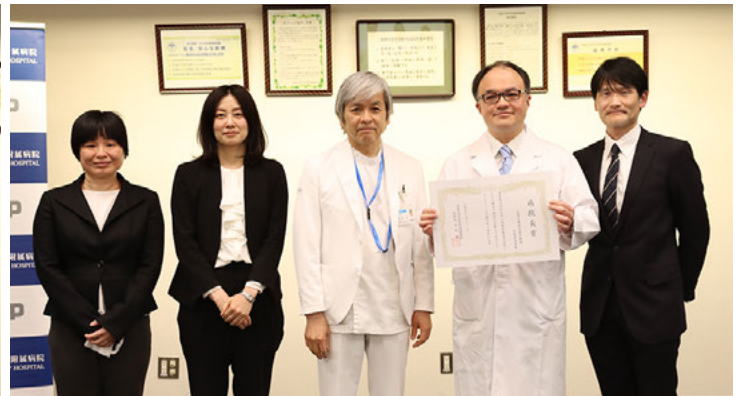
受賞した京都大学肺移植チーム



受賞した肝胆膵・移植外科/小児外科



受賞した摂食嚥下診療センターチーム



受賞した先端医療研究開発機構医療開発部

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

人生万事塞翁が馬

望月 晴文



私が京都大学に入学したのは1969年、ちょうど大学紛争が終局を迎えた時期でした。高校3年の時に部活のサッカーを卒業できずに、仲間が受験勉強に帰宅するのを横目に球を蹴っていました。受験をなめていたのですが、見事に失敗。自宅は神奈川でしたから、東京の予備校に通いました。大学紛争の最終盤で、全学ストの学生が立てこもっていた東大安田講堂が陥落、逃げる学生を追いかけた機動隊の発射した催涙ガスが、予備校の教室にも流れてきてえらい目にあいました。

東大入試が中止され、予備校にいた多くの仲間と一緒に京都大学を受け、おかげで予期せぬ京都での下宿生活に入りました。クラスの仲間はほとんどが大学の徒歩圏内に住み、いわば同じ町内会の独り者の集まりでした。同級生は北は北海道から南は鹿児島まで、同じ出身地の者は東京と大阪が2人ずついただけでした。

この京都の生活はたった4年間でしたが、私の人生の貴重な宝物のような一瞬でした。誰かの息子でも娘でもなく24時間学生でいられる環境とはすばらしい時間でした。周りもみな学生ですから、お互い下宿でよく議論もしました。一度など、哲学部の仲間に「自分のやっているのは実学だが、君たちがやっているのは虚学だ」と言ってすごく怒らせたことがありますが、結果的に相手が大変な量の本を読んでいることがわかって恥じ入ったことがありました。

ただ京大も全学ストが秋頃まで続き、開講されている授業も暫らくありませんでした。親から仕送りしてもらいながら遊んでばかりでは申し訳ないと思い、法学部の佐藤幸治先生にお願いして、仲間10人ほどで自主講座を開いていただきました。もちろん大学の成績などとは関係なく、ただ勉強したいことをひたすら学んだ数か月でしたが、いま思うとあれほどまじめに勉強したことはないというほどよく勉強しましたし、大学とはこういうものだと実感できました。

就職した1973年ごろは日本が戦後復興から工業立国になり高度成長を経て世界第2の経済大国「ジャパンアズNO.1」と言われつつあった時期でした。日本の経済発展の一翼を担いたいという志はあったのですが、自分が商売をやるということには性格が向かない気がして、むしろ国の経済政策をやりたいと思い、当時の通商産業省に入りました。

その後、二度にわたる石油危機、日米貿易摩擦、円高不況、バブル崩壊、リーマンショックなど、経済がどんどんグローバル化していく中で様々な出来事、課題に遭遇してきました。政策にかかわった者としては、常に「この本質を見極め、ロジカルシンキングをとことん追求する」「我が国はもとより人類レベルでの経済社会の繁栄を目指す」という志を仲間と共有してきた幸せな役人人生であったと思っています。

昨今、役人バッシングが激しいことはとても残念ですが、チャレンジする価値のある職業だと思えます。人生は予測しないことがたくさん起こるからこそ楽しいのであり、人生万事塞翁が馬とつくづく思えます。

(もちづき はるふみ、元経済産業事務次官、安全保障貿易情報センター理事長、
昭和48年法学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

東南アジアの森林調査を
通じて今想うこと

名誉教授 神崎 護



大阪市立大学の博士課程に在学していた27歳の時に、初めてタイに調査に出かけた。それから定年退職するまでの40年近く、東南アジアの国々での森林調査に明け暮れてきた。私の専門は森林の生態と管理なのだが、その国の社会や政治体制の変化に驚かされることも多かった。

初めて熱帯林を経験したタイでは、過去40年ほどの間に森林に対する考え方が大きく変化したのに驚かされた。1980年代はタイにおける農地拡大の最後の時代で、まだまだ森林保護の考え方は社会に浸透せず、いたるところで違法な森林開墾の現場を目にした。タイの農民は移住を厭わず、土地を持たない農民が、故郷から遠く離れた森林地帯に掘っ立て小屋を建てて開墾を進めていた。しかし、現在タイは出生率の低下で人口はほぼ横ばい状態となり、農地化の圧力は大きく減少した。河川では土砂災害と洪水が多発し、経済的なダメージも大きい。市民の間では、森林減少と水害の頻発の関係が強く認識されているようだ。タイの山村を訪れて村長さんに話を聞くと、水源林を保護していることを自慢げに話すようになった。人間にとっての40年は長く、社会の変化も大きい。森林がこの間に速やかに回復したわけではない。しかし、この社会の変化は今後の森林回復にとっては、重要な促進要因だろう。

1999年に京都大学に異動してからは、ミャンマーやカンボジアを調査する機会を得た。タイではすでに見ることのできなくなったタイプの森林を、この二つの国で目にする事ができた。私にとっては本当に幸運で、楽しい時間を過ごした。しかし、この両国の歴史を考えると喜んでばかりはいられない。

カンボジアでは、ポルポト政権時代の知識人が受けた迫害が、森林行政にも大きな影を落としていた。タイやミャンマーでは、木の種類や森林にとっても詳しい年配の森林官や研究者がいて、森林管理にかかわる人々の重層性というようなものを感じる。しかし、2003年に初めてカンボジアを訪れた際には、スタッフが皆若いのに驚かされた。森林を守ろうとする森林官と農地を広げたい農民の関係は、どの国でもあまり良くない。1970年代のポルポト政権下では、医者や技術者などとともに、多くの森林官が虐殺されたと聞いた。調査を共にしたスタッフ達は、今ではすでにベテランとなっている。この国の森林の行く末を担う重責を、彼らが帯びているのだろう。

2021年のクーデターでアウンサン・スー・チー氏が率いる民主政権が倒されたミャンマーでは、多くの医療関係者や公務員が軍事政権に反対し、非服従の活動に参加した。今でも軍事政権に追われ、苦しい日々を続けている私の教え子もいる。日本に居てできることはほとんど無いのだが、彼らの無事を祈り連帯の気持ちは伝え続けたいと思っている。この政変により、森林管理体制はいったいどうなっているのか、窺い知ることもできない。水資源と防災にとって重要な森林の将来にも、不安を禁じえない。ミャンマーの平和を祈りながら、筆をおきたい。

(かんざき まもる、令和4年退職、元農学研究科教授、
専門は森林生態学、特に熱帯林の生態と管理)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

Kyoto iUP

佐々木 幸喜



今、京都大学に Kyoto iUP (Kyoto University International Undergraduate Program) というプログラムがあるのをご存知でしょうか。Kyoto iUP (アイアップ、と読みます) は、6ヶ月の予備教育と4ヶ年の学士課程からなる留学生プログラムで、2018年10月に学生の受け入れを始め、2023年3月に初めての卒業生を送り出しました。2023年4月時点で、70余名のiUP生が京大で学んでいます。

留学生プログラムとしてのiUPの新しさは、語学に関する選考を英語で行い、入学時点での日本語能力を問わないことにあります。プログラムに合格した時点では、ほぼ全員がいわゆるゼロ初級です。そんな彼らは、2回生になるまでの2.5年間で日本語を勉強しつつ、2回生までは英語/日本語で教養・共通教育を受け、3回生からは日本語で専門教育を受けます。知っていたきたいのは、これをこなすのにiUP生がどれだけ努力を重ねているかということです。

一般的な留学生であれば、母国で日本語を専攻していたり、そうでなくても来日後、日本語学校などに籍を置き、2年ほどかけて、少しずつ日本の社会を知りながら大学入学を目指します。しかし、iUP生は、それをわずか半年でやってのけます。これは、iUPが、その国・地域でもっとも優秀な学生を選抜しているからだといっても過言ではありません。来日後、私たちが想像する以上の難しさに直面しているはずの彼らですが、その持ち前のチャレンジ精神で乗り越えようと頑張ります。そういう姿には脱帽です。ここでは、彼らが乗り越えている/きた困難点を二つ挙げます。

一つは、何ととっても、「日本語そのもの」です。一般的な日本語教育では、語彙は段階を踏んで少しずつ増やしていきます。例えば、動詞の「与える」。最初に勉強するのは「犬にえさを与える」、次は「彼に機会を与える」のように、具体的なものに使えることをまず学び、それから、抽象的な場合にも使えることを勉強していきます。しかし、iUP生たちは、「犬にえさを与える」を学んでいる最中に、次のような使いかたに出くわします。それが「……の最大値を与えるような……をすべて求めよ。」というような表現です。これは、2020年度の数学(理系)の個別学力検査から採った例です。もちろん、そこに意味の違いがあります。日本語の学習期間が長い人であれば、語感で違いを知る、少なくとも、今まで学んできたこととは違うということを感じとることができるでしょう。しかし、学習期間が半年間しかないiUP生に、そのようなニュアンスの違いを感じとってほしいというのは、なかなか酷な話です。私たち教員の役割は、語彙そのものを教えることはもちろん、分野によって使いかたが異なること、その分野ごとの考えかたを身につける術を伝えることです。そして、こういった狙いをいつもしっかり受け取ってくれる彼らを自慢したいとも思います。

もう一つは、「勉強は教科書だけではないこと」です。こんなことがありました。

あるiUP生が授業の前に写真を1枚見せてくれました。その写真には、石碑が写っていました。東大路東一条の北東角にある、あの石碑です。「何か文字のような、そうじゃないような…」読めないのも無理はない。変体仮名で書かれているからです。せっかく古都京都にいたら、授業で変体仮名を取り上げてみようと思い、街中の変体仮名で書かれている石碑や看板を題材

洛書

に、授業をしました。

後日、受講生の一人から、うれしい報告がありました。日本人の友だちと京都市内を回っているときに、同じような看板を見つけ、そこに書かれた変体仮名を何気なく読んだところ、みんなが驚いたのだそう。日本人に読めなかったものが外国人である自分にはわかったことがちょっとうれしく、日本のことについてもっと知りたいと連絡してきてくれたのです。変体仮名は、日本人ですら触れる機会が少なく、日本語学習者であるiUP生にとってはなおのこと。ですが、この学生のように、日常生活の中でその知識を身につけていることによってちょっとしたところで達成感を覚え、その達成感を積み重ねることが、学習のモチベーションにつながっていくといえるのではないのでしょうか。ひいては、その土地の社会なり文化なりを知ってはじめて、留学の醍醐味が感じられるといえるはずです。そして、こういった経験ができるのも、古都京都ならではの、それも京大で学ぶ学生だからこそ。知識の幅をぜひ自分の強みにして欲しいと願ってやみません。

(ささき ゆうき、国際高等教育院吉田カレッジオフィス(兼)附属日本語・日本文化教育センター特定准教授、専門は日本近現代文学、日本語教育学)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、若林二郎 名誉教授、高橋康夫 名誉教授、吉田善一 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

若林 二郎 名誉教授

若林二郎先生は、令和5年5月20日に逝去されました。享年94。

先生は、昭和26年3月京都大学工学部電気工学科を卒業後、民間会社勤務を経て同年9月京都大学工学部助手に採用され、昭和33年4月同大学工学研究所講師に昇任、昭和34年12月同研究所助教授に昇任、また同大学から工学博士の学位を授与されました。昭和40年12月京都大学工学研究所（昭和46年4月京都大学原子工エネルギー研究所に改称）教授に昇任し、原子炉計測工学研究部門を担当されるとともに、平成元年11月から平成3年10月まで同大学原子エネルギー研究所長、同大学評議員を併任され、同研究所および大学の管理運営に貢献されました。平成4年3月京都大学を停年退官、同年4月名誉教授の称号を授与された後、舞鶴工業高等専門学校長に就任され、同校の充実・発展に寄与されました。



この間、電気工学分野においては直流電力を交流電力に変換するインバータ回路の研究を行い、その動特性制御ならびに電圧変動、負荷変動などの各種外乱に対する過渡的安定性を解析的、実験的に解明するとともに、サイリスターを用いた高周波インバータの開発に貢献されました。また、原子力工学分野においては原子炉の事故時動特性および原子炉炉心の空間依存動特性の研究を進展させ、零出力原子炉の炉心内における中性子の空間的、エネルギー的動特性を解析するための新しい近似計算法（少数極展開法）や計算機・情報処理技術の進歩に呼応して新しい計算機シミュレーションの研究を行い、ハイブリッドシミュレーション法、モジュール統合型シミュレーションシステムなどを提案されました。その他情報の知識処理に当たって、従来の定性推論を拡張して、定量的情報を取り入れたプラント異常事象診断法などの研究も進められました。これらの研究は、現在先進各国が進めている原子力発電支援システムの開発研究へとつながり、ソフトウェア的技術により原子力プラントの信頼性や安全性を向上させる方法として注目され、これらの卓越した業績により平成17年には瑞宝中綬章を受章されました。

（エネルギー理工学研究所）

[目次に戻る ↗](#)

訃報

高橋 康夫 名誉教授

高橋康夫先生は、令和5年4月14日ご逝去されました。享年76。

先生は、昭和44年3月京都大学工学部建築学科を卒業、昭和46年3月同大学大学院工学研究科修士課程建築学専攻を修了されました。同年4月同大学工学部助手に採用され、昭和56年12月講師、昭和62年4月助教授、平成7年7月教授に昇任され、工学部建築学科建築史講座を担当されました。この間、昭和55年3月に京都大学博士(工学)の学位を授与されています。大学院重点化に伴い平成8年4月同大学大学院工学研究科生活空間学専攻生活空間計画学講座建築・地域空間史学分野を、改組に伴い平成15年4月からは同研究科建築学専攻建築史学講座を担当されました。その後平成22年3月定年により退職され、名誉教授の称号を受けられました。退職後は、花園大学文学部文化遺産学科教授を務められました。



この間永年にわたって学内においては、建築史・都市史に関する研究と講義に尽力し、学生の教育と研究者の指導にあたられました。さらに、京都大学百年史編集委員会委員、文化財総合研究センター協議員、大学文書館運営協議会協議員、総合博物館運営委員会委員、清風荘庭園整備活用委員会委員などを務められました。学外においては、日本建築学会理事、建築史学会会長として都市史学・建築史学の発展に指導的役割を果たされ、東アジア建築文化国際会議京都2006においては実行委員長として会議を主宰し、都市史学・建築史学の国際交流に貢献されました。また、文部科学省文化審議会専門委員、京都府・京都市をはじめとする地方自治体の文化財保護審議会委員、一般財団法人建築研究協会理事長、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所理事長などを務められ、専門の立場から文化財保護にも尽力されました。これらの功績により令和5年4月14日付で従四位瑞宝小綬章を受けられました。

研究面では中世京都を中心とした都市の歴史の変遷を、京町家という建築やそこに住まう人びとの営みとともに明らかにする研究を展開し、『京都中世都市史研究』(思文閣出版、昭和58年)をはじめとする著書や多くの学術論文として発表され、今日の日本都市史学を築かれました。その成果は「中世京都に関する一連の都市史研究」として平成6年日本建築学会賞(論文)を受賞し、また『京町家・千年のあゆみ—都にいきづく住まいの原型』(学芸出版社、平成13年)は、平成13年度建築史学会賞を受賞しています。近年も京都と琉球を中心に研究を続けられ、『海の「京都」—日本琉球都市史研究』(京都大学学術出版会、平成27年)、『京都と首里—古都の文化遺産研究』(文理閣、令和2年)を発表するなど、都市史学・建築史学の発展に多大な貢献をされました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

吉田 善一 名誉教授

吉田善一先生は、令和5年5月4日逝去されました。享年97。

先生は、昭和24年3月京都大学工学部工業化学科を卒業、同大学大学院特別研究生を経て、昭和26年4月同大学工学部助手に採用され、昭和29年11月に同大学より工学博士の学位を授与されました。昭和36年4月助教授、昭和38年10月教授に昇任し、合成化学科物理有機化学講座を担当されました。平成元年3月31日停年により退官され、名誉教授の称号を授与されました。退官後は、平成2年4月より近畿大学理工学総合研究所特任教授、平成3年4月からは同大学理工学部特任教授として研究と教育に従事されました。



この間の研究成果は多くの著書や500編を超える学術論文にまとめられ、国内外で高く評価されています。これらの業績に対して、日本化学会賞、有機合成化学特別賞、紫綬褒章、勲二等瑞宝章、ニューヨーク科学アカデミー外国人会員など、数々の栄誉を受けています。先生は、有機化合物の新しい機能や性質の開拓と発見を目指した創造機能化学を新しい分野として確立され、特に新奇芳香族化合物、蛍光色素と高ひずみ化合物のデザインと創製において世界を先導する成果を挙げています。既に昭和50年代に光エネルギー貯蔵と有効利用の重要性を認識され、光エネルギーを高ひずみ化合物の化学エネルギーに変換・貯蔵し、これを触媒反応によってひずみを解き放ちながら出発物質に戻して熱エネルギーとして回収する、可逆的太陽エネルギー化学変換貯蔵システムの基礎および実証研究を進め、高い評価を集めました。また、後にノーベル化学賞の授賞対象となったサッカーボール型分子 C₆₀ を、その発見の10年以上前にその構造式とともに著書中で予見されていたことも特筆されます。

先生は日本化学会会長、近畿化学協会会長、日本学術振興会第116委員会委員長、文部省学術国際局学術審議会専門委員などを歴任され、学術の振興に貢献されました。また、早くから国際学会活動の推進による日本の学術の世界に向けた発信の重要性に目を向け、国際有機化学京都会議 (IKCOC) および機能性色素国際会議 (ISFD/Fπ) を議長として創設されました。これらの国際会議は現在でも存在感を増しながら発展を続け、重要な国際会議として世界的に認知されています。さらに先生は、平成24年に一般財団法人国際有機化学財団を設立され、その代表理事として、国際学術交流支援、中高校生に対する有機化学普及活動、国際化学オリンピック代表生徒の実験指導支援、アジアの研究者に対する表彰制度の設立など、国際学術交流の一層の推進と日本における化学の振興に尽力されました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る](#)